

子どもの力も必要だった戦争

6年 社会科

I 実践の目指しているもの

単元の導入で、平和バーチャル資料館の「戦争体験映像証言」を活用する。実際に体験をした生の話を聞くことで「歴史」を少しでも身近に感じさせ、より戦争に興味・関心をもち、目的意識をもって課題を追究していくことができると考える。体験談をもとに「約15年の間で行った戦争はどのようなものだったか」という単元を貫く課題を設定する。

教科書には太平洋戦争の開戦以降、沖縄戦まで、前線での様子の記述はほとんどない。一方で、戦時中の国民生活、とりわけ子どもの生活の様子が詳しく記述されている。銃後の国民生活の変化を読み取らせることで、これまでの日清・日露の戦いとは大きく異なり、兵士だけでなく国民全体が戦争に深く関わっていたことを捉えさせる。改めて、戦争は二度と起こしてはいけないものであるということ子ども視点で考えさせたい。

今回は、副読本として「札幌市民の戦争体験」を活用する。体験談を資料とすることで、軍事教練や勤労奉仕について実感の伴った理解を深めさせたい。単元の導入で聞いた体験談も関連させ、具体的な事象に対する見方を広げさせていく。

子どもたちの生活について、「訓練」と「勤労」の二つに分類する。調べた事実から「本当に子どもがそこまでやる必要があったか」を問い、それらの活動にどのような意味があったかを考えさせる。漠然と「戦争で大変だったから」という見方で終わるのではなく、「今」と「将来」のために子どもの力も必要だったこと、その背景には戦況の悪化があったことに気付かせたい。「戦争」というものの実態を様々な角度から捉えさせることができると考える。

II 研究の内容

1 題材名（単元名）

「長く続いた戦争と人々の暮らし」

2 題材の目標（単元の目標）

- 戦争の経緯と国民生活の様子について関心をもち資料から調べ、積極的に考えようとしている。【関心・意欲・態度】
- 戦争の経緯や国民生活の様子について学習問題を見だして調べ、他国との関係の変化や国内外の被害の状況と関連付けて考え、適切に表現している。【思考・判断・表現】
- 戦争の経緯や国民生活の様子について、資料を活用したり体験者から聞き取ったりして調べ、まとめている。【技能】
- 日本の戦争がアジア・太平洋に広がっていく経緯や被害、社会の様子や人々の暮らし、他国との関係の変化について理解している。【知識・理解】

3 題材の指導計画（8時間扱い）・単元構成など

太平洋戦争を体験した方に当時の話を聞こう。

生きるか死ぬかの戦いだっただ。

たった70年前の出来事？

どうして戦争が起こったの？どんな戦争だったの？

日本はどうして戦争をはじめたのだろうか。

満州を手に入れようとして

世界から孤立していった

日本は満州の資源を求めて、中国と戦争になったんだ。この後、どうなったのだろうか。

日本が中国で行った戦争は、どのように広がっていったか。

日本は資源を求めた。

アメリカは中国を支援

石油の輸出も止められ、アメリカとも戦争をすることになったんだ。

戦争中の国民がどんな生活をしていたのか。

厳しい国の統制があった

国民生活は「戦争中心」に。苦しい生活がまんしていた。少しずつ戦況が悪化し始めたようだ。

子どもたちはどんな生活をしていたのか。

戦争の訓練をしている

子どもの力を必要とするほど、ますます戦況は悪化していったんだ。

空襲で日本各地はどのような被害を受けたのか。

大都市や太平洋側に多い。

空襲によって国民は大きな被害を受けたんだ。国内に安全な場所がないほど戦況はひどいことに。

戦争はどのように終わったのか

多くの人の命と引き替えに長い戦争が終わった。平和とは？自分たちがすべきことは？

4 本時について

(1) 本時の目標

国民学校の子どもたちの暮らしの様子について調べ、だんだん戦況が悪化していったことから、子ども力までもが戦争に必要とされていった事実が分かる。

(2) 本時の展開 (7/8)

児童の活動・ものの見方や考え方

教師のかかわり

(前時まで)日本が戦争を始めた理由、日本がアジア・太平洋各地に戦争を広げていった様子、戦時中の国民生活の様子などについて、実際に出征した方の体験談を映像で見たり、資料で調べたりしている。

○国民学校の通知表を提示する。



昔も今と同じような勉強をしていたのかな。

戦争中だから「武道」があるのかな？

農業の時間があるよ。どんなことをしていたのかな

国民学校の子どもたちはどのような生活をしていただろう。

国民学校ではどのような学習をしていたかを知らせる。「武道」や「農業」など、今にはない授業があったことから当時の子どもの生活に関心をもたせる。

○戦争の訓練

- ・銃剣で相手をつく訓練
- ・乾布摩擦
- ・木のぼっこで

○「大人になったら兵士に」と

- ・教科書に「兵隊」さん
- ・雑誌の表紙も

(将来の)戦力になるために

子ども力も必要に

○援農の仕事

- ・農家のお手伝い
(いも堀り・にんじん堀り)
- ・ホップ摘みの仕事

○工場での仕事

- ・兵器をつくる工場でも
- ・おとりの飛行機づくりも...

(今の)生活を支えるために

本当に子どもがここまでする必要はあるのかな？

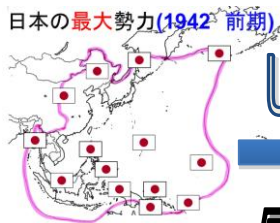
次々と大人が兵隊に行ったんだ

ますます食糧も作れないし、武器も...

「がまん」するだけでなく、子どもまでもが

これまでに学習した「日清・日露戦争ではここまでしていなかったのに」という視点で考えさせ、子どもまでもが戦争に必要となっていたことと戦況の悪化を関連付けて考えさせる。

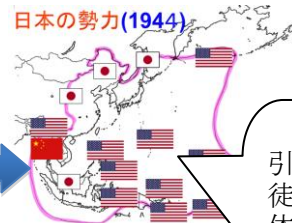
戦争に子ども力も必要になっていったんだ。



日本の最大勢力(1942 前期)

しだいに敗戦を重ねるように...

国民全体が戦争と関係していたんだ...



日本の勢力(1944)

徴兵年齢の引き下げや学徒勤労動員の体制が強化されていく資料を提示し、「戦況の悪化」に目を向けさせる。

子どもも国のために戦争に関わっていたんだ。子どもが訓練をしたり、働いたりしないといけないほど戦争の状況も悪化していたんだ。

5 実践のポイント

【成果】

- 子どもたちは「札幌市民の戦争体験」の資料をしっかりと読み取ることができていたため、根拠を明確にして発言することができた。また、札幌市民の実際に体験した話であるため、より「実感」を伴って当時の子どもの生活の様子について捉えることができた。
- 「札幌市民の戦争体験」は、本単元の学習で活用できそうなところをピックアップし、冊子にまとめて単元の導入で渡していた。そのまま渡すと分量が多いので、どこから考えればいいのか戸惑うと考えたからである。授業だけでなく、読書の時間や自主学習でも活用している子が多かった。自主学習では、冊子に自由に自分の考えを書いている子もいた。導入で、興味関心をもたせると活用の幅が広がることが分かった。
- 個で考えをもつ場では、それぞれの考えをしっかりと見取り、それを基にテンポよく発言させることができた。
- 「今」だけではなく、「将来」を見据えた発言も子どもから出た。この単元に限らず、これまでの社会科の学習でこのような見方や考え方を育ててきた成果だと言える。

【課題】

- 本時のゴールが不明確だった。目標が「事実が分かる」になっていたため、理解そのものはできていたが、そこからどのようなことを思考・判断し、表現すべきだったかを考えていく必要がある。これは、これからの新しい学習指導要領改訂に向けた育成すべき資質・能力とも結び付く。知っていることをどう使い、これからどのように社会と関わっていくべきか。そこまで考えさせる一時間を構築すべきだった。
- 構造的な板書にすることができなかった。大きく「今」と「将来」の二つの視点でくくろうとしたが、そのキーワードについて深く考えさせるまでに至らなかった。子どもの事実認識をしっかりと関係付けていくことができれば、より思考を整理することができるはずである。
- ゲストティーチャーを招きたかったが、高齢化などに伴い難しいところがあった。今回は「平和バーチャル資料館」については、あまり時間的に活用ができなかったが、「札幌市民の戦争体験」と並行して活用できれば、さらに実感を伴った学習になると考える。